



## ジャーナリストが見たままの現場

松本 侑壬子・ジャーナリスト

間もなく「3・11」からまる2年目を迎えようとしている。あの日の、未曾有の震災・人災の様子は、東北の被災地から無数のメディアに載って全国、全世界へ発信された。現地から遠く離れていても、私たちはテレビやパソコンにかじりつき、また新聞のページをめくって精読し、何が起こったかを知った。

だが、この映画を見ると、私たちが得た現地の情報の背後にはこういう現実があったのか、と改めて背筋が伸びる気がする。

これは、遺体置き場となった中学校の体育館にいたジャーナリストが、ニュースとしての報道では伝えきれなかった東日本大震災の現場の壮絶なルポルタージュ（石井光太著『遺体 震災、津波の果てに』新潮社刊）の映画化である。映画が撮影されたのは震災の1年後だが、映画化に当たって何度も現地に足を運び、当時の関係者（実在のモデル）に会って取材を重ねて、可能な限り当時を再現した。実際、映画は俳優が演じているにもかかわらず、まるでドキュメンタリーのような現実感に圧倒される。

運命の14時46分、マグニチュード9.0、最大震度7の地震と、その引き起こした津波は、最大40メートルにも及ぶ高さで岩手県釜石市を襲った。混乱の中で、今は廃校となった旧釜石第二中学校の体育館が犠牲者の遺体安置所と

して使われることになった。次々と運び込まれる遺体に、警察も市の職員も最初はなす術もなく、戸惑うばかり。駆けつけた葬儀社の社員も、あまりの遺体の多さに絶句する。

民生委員の相葉（西田敏行）は、青いビニールシートを敷いた床にどすんどすと無造作に置かれていく遺体を見て、すぐにボランティアとして安置所の世話係を申し出る。定年前は葬儀社に長年勤めており、遺体の扱いに慣れ、遺族の気持や接し方も弁えていた。

遺体は「死体」ではない。一人ひとりに声に出して話しかけ、硬直した手足を揉んで姿を整え、女性には死化粧を施す。夫婦の遺体はせめて並べてあげたい。探しに来る遺族もさまざま、職員にくっつく者や若い娘の亡骸から片時も離れない若い母親もいる。不眠不休で黙々と検死、DNA採取、身元確認のための検歯を続ける医師や歯科医たち。やがて急造りの棺桶が並べられ、女性職員心づくしの祭壇の前で供養に訪れた地元の住職の読経の音が流れる…。

自分自身のアパートが流され、親友が行方不明で放心状態の若い職員、恩人の遺体を見て泣き崩れる女性職員、いつ終わるとも知れぬ作業に気力を奮い立たせる医師…それぞれが自らが被災者でありながら一人でも多くの遺体を家族の元に帰すという大義のために自分にできることを精一杯やり遂げようと頑張る姿。誰も体験したことのない非常事態の中で、定点観測的に丁寧に描かれた安置所の様子が、ニュースでは伝えきれないその場の雰囲気まで含めて、なるほどとよくわかる。再現ドラマ的な、ドキュメンタリーのような劇映画といえ言えるのだが、それがこの映画の使命。貴重な人間記録として多くの人に見てほしい作品である。

## 『遺体 明日への十日間』

日本映画（105分）／君塚良一監督

公開中

© 2013フジテレビジョン

